様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１１５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０２８０

研究課題名（和文）ホガース研究：その神学とエロスの構図

研究課題名（英文）A Study of Hogarth: Theological and Erotic Structure in Hogarth

研究代表者
中村　隆（NAKAMURA, Takashi）

山形大学・人文学部・教授

研究者番号：００２０７８８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,600,000円、（間接経費）　480,000円

研究成果の概要（和文）：(1)ホガースと理神論について。英国18世紀に興隆した理神論は、合理的な問いかけが許されるべきという「表現の自由」への同意を導いた。ホガースにおける自在な宗教批判の1つの理論的根拠となったのが「表現の自由」を保証する理神論であることが明らかにされた。(2)ホガースとフリーメーソンについて。ホガースの幾つかの図像の中にフリーメーソン受容の痕跡が見られることを証明した。(3)ホガースのポルノグラフィは「好色な聖職者」の図像と露骨なポルノグラフィであり、公になれば「発禁」となる「好色もの」に大別される。いずれのカテゴリーにおいても、その根源的構造がエロス的要素から成立していることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study has clarified three things. (1)Hogarth's relationship with "deism" testifies to his reliance to the freedom of expression. (2)Hogarth's relation to freemasonry is elucidated by his engravings. (3)Hogarth's pornography is divided into two: lecherous clergyman and lecherous couple.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：ホガース　神学　エロス　フリーメーソン　イギリス国教会　メソディズム

１．研究開始当初の背景

従来のホガース（William Hogarth）研究において、神学あるいはキリスト教という視点からの研究が必ずしも充分ではなかった。このことを例証するのが、以下の代表的な 10 点のホガース研究である。（個々の論文についてはここでは省略する。）

① John Trusler, *The Works of William Hogarth* (1833)
② Charles Michell, *Hogarth's Peregrination* (1952)
③ Frederick Antal, *Hogarth and his Place in European Art* (1962)
④ 櫻庭 信行、『絵画と文学 ホガース論考』（増補版）（1987）
⑤ David Dabydeen, *Hogarth, Walpole and Commercial Britain* (1987)
⑥ Ronald Paulson, *Hogarth's Graphic Works* [Third Revised Edition] (1989)
⑦ Ronald Paulson, *Hogarth* I-III (1991-93)
⑧ Jenny Uglow, *Hogarth: A Life and a World*（1997）
⑨ Mark Hallett, *The Spectacle of Difference: Graphic Satire in the Age of Hogarth* (1999)
⑩ Ronald Paulson, *Hogarth's Harlot*（2003）

ホガースの少なくない作品が、痛烈な英国国教会、ないしは、キリスト教全般への批判となっていることはよく知られている。しかし、上記の先行研究が示すように、ホガースにおける反・キリスト教の態度、あるいは、宗教憎悪の意味の解明については、部分的な言及はあるにせよ、充分な研究がなされてきたとはいいがたい。

しかし、時に激烈なキリスト教批判がホガースの版画に埋め込まれていることの意味は広く、大きい。そこで本研究は、ホガースにおけるキリスト教の意義を中心主題として、考察することとした。

２．研究の目的

合理精神に裏打ちされた「理神論」と汎神論的な「フリーメーソン」を受容したホガースは、キリスト教（とりわけ英国国教会）への懐疑を深めていく。この時、興味深いのは、ホガースにおける反・キリスト教の思想が、エロスの文脈、すなわち、ポルノグラフィと密接不可分な形で結びつくことである。本研究は、
①理神論
②フリーメーソン
③ポルノグラフィ
という 3 つの主題を考察する。そして、ホガースと神学とエロスという枠組みにおいてホガースの図像作品を精緻に解析する。

３．研究の方法

①ホガースにおける「理神論」の意味解析

英国 18 世紀の「理神論」に関連するテクストを歴史的文脈の中で掘り起こし、それらのテクストの意味分析を試みる。そして、18 世紀前半の理神論をめぐる激しい論争の経緯とその意味を考察し、ホガースがどのような形で理神論を受容し、キリスト教懐疑主義へ傾いていったのかについて、個別の作品を分析することによって明らかにする。

個別の作品分析にあたっては、パノフスキー（Erwin Panofsky）が提唱した「イコノロジー的解釈」（Iconological interpretation）を援用することにより、図像作品からホガースという画家における宗教的態度を解明する。

あわせて、ホガースを取り巻いていた「理神論」をめぐる文化的・歴史的状況を再構築する。

②ホガースにおける「フリーメーソン」の意味解析

「兄弟愛」の理想を掲げ、すべての宗教は 1 つと考える独自の宗教観を持っていたフリーメーソンにホガースが加入したのは 1725 年の 11 月頃とされている。ホガースにおけるフリーメーソン受容の意味を分析するために、英国 18 世紀の「フリーメーソン」に関連する文化テクストとして、当時の新聞記事などを調査し、それらのテクストの分析を試みる。そして、ホガースがどのような形でフリーメーソンを受容したのかについて、個別の作品に図像分析を適用することによって明らかにする。

個別の作品分析にあたっては、上述の通り、パノフスキーが提唱した「イコノロジー的解釈」を援用する。

③ホガースにおける「ポルノグラフィ」の意味解析

合理主義精神からもたらされた「理神論」と汎神論的な「フリーメーソン」を受容したホガースは、キリスト教（とりわけ英国国教会）への懐疑を強め、キリスト教からの乖離を深めていく。この時、興味深いのは、ホガースにおける反・キリスト教の思想がポルノグラフィと密接不可分な形で結びつくことである。ホガースにおけるポルノグラフィの意味の分析をするために、以下の 2 つのことをする。
(a) 18 世紀に流行した正当ではない「小説」としてのポルノグラフィ（もしくはエロティカ）を読み、そのテクスト解析をする。
(b)ポルノグラフィ文学がホガースのエロティックな図像作品に与えた影響と、逆に、ホガースのエロティックな図像作品がポルノグラフィ文学に与えた影響について考察する。

４．研究成果

①ホガースにおける「理神論」について

英国 18 世紀に興隆した理神論は、合理精神への信頼と、合理的な問いかけが許されるべきという「表現の自由」への同意を導いた。ホガースの図像作品は、英国国教会批判に満ち、聖職者の腐敗を糾弾する側面を持つが、彼における自在な宗教批判の 1 つの理論的根拠となったのが「表現の自由」を保証する理神論であることが明らかにされた。

具体的には、ホガースにおける英国 18 世紀の「理神論」の受容の実態に関して、以下の 3 つの事柄が解明された。

(a)理神論の先駆けとなったウルストン（Thomas Woolston）の『我らの救済者の奇跡についての議論』（Discourses on the Miracle of our Saviour, 1729）のテクスト分析の結果、ウルストンのテクストとホガースの幾つかの版画作品（『娼婦一代記』第 2 図等）が共通の主張内容を持っていることが明らかにされた。

(b)ウルストンの『我らの救済者の奇跡についての議論』が同時代の人々にどのような影響を与え、反響を喚起したのか、18 世紀前半の英国の定期刊行雑誌（新聞）の記事を精査することによって解明がなされた。

具体的には、Steele が主幹を務めた『タトラー（*Tatler*, 1709-11）および、Addison と Steele が主幹を務めた『スペクテイター』（*Spector*, 1711-12）などの記事の中に、ウルストンへの思想への言及とコメントがあること見いだした。そして、英国の文化的・歴史的状況において、「理神論」が一定の影響力を持っていたことを証明することができた。

(c)『我らの救済者の奇跡についての議論』は、新約聖書におけるイエスの奇跡を根底から否定したために、「不敬罪」に問われた。しかし当時 3 万部というベストセラーとなった。

ホガースは不敬罪に問われることは免れたが、ウルストンのこの著作に影響を受けていた彼は、自身の版画の中に明瞭な「不敬罪」的な図版を挿入している。

たとえば、『娼婦一代記』（*A Harlot's Progress*, 1732）の第 1 図と第 6 図、『眠る会衆』（*The Sleeping Congregation*, 1736）、『妄信、迷信、狂信』(*Credulity, Superstition, and Fanaticism*, 1762 ）の内部に、不敬罪とキリスト教弾劾の意味内容が埋め込まれている。

②ホガースとフリーメーソンについて

「兄弟愛」の理想を掲げ、すべての宗教は 1 つと考える独自の宗教観を持っていたフリーメーソンにホガースが加入したのは 1725 年の 11 月頃である。ホガースにおけるフリーメーソン受容の意味を分析するために、英国 18 世紀の「フリーメーソン」に関連する文化テクストとして、当時の定期刊行雑誌（新聞記事）などを調査した。また、ホガースがどのような形でフリーメーソンを受容したのかについて、個別の作品に図像分析を施すことで解明した。

具体的には以下の 3 つことに要約できる。

(a)「兄弟愛」の理想を掲げるフリーメーソン団は 1717 年にロンドンで発足し、1723 年にアンダーソン（James Anderson）によって、『フリーメーソン規約』（the Constitutions, 1723）が作られている。フリーメーソンの思想的基盤を解明するために、この『フリーメーソン規約』を精読した。その結果、『フリーメーソン規約』は、この結社（団体）の根源的本質を語る重要な文書であることが明らかにされた。元々は「石工組合」であるフリーメーソンは、建築学と深く結びついていた。そのために「ユークリッド幾何学」を組織の理論的支柱とするなど、独特な数学的思想基盤を持っていた。それを示す象徴的図像は「三角形」であるが、これは、たとえばホガースの『妄信、迷信、狂信』（1762）の中に描かれている。

(b)18 世紀前半の英国の定期刊行雑誌（新聞記事）を参照することにより、『フリーメーソン規約』が同時代の人々にどのような影響を与え、反響を喚起したのか解明した。これについては、ポールソン（*Hogarth* I-III [1991-93]）とハレット（*The Spectacle of Difference: Graphic Satire in the Age of Hogarth* [1999]）の先行研究が一部解明しているが、本研究は、さらに押し進めて、『タトラー』（1709-11）と『スペクテイター』（1711-12）の記事の中に、幾つかの『フリーメーソン規約』への言及とコメントがあることを同定した。

(c)ホガースの『眠る会衆』（1736）、『妄信、迷信、狂信』（1762）、『放蕩息子一代記』（1740）の第 1 図を取り上げ、これらに、パノフスキー流のイコノロジー的解釈を援用することで、これらの図版にフリーメーソン受容の痕跡が見られることを証明した。

③ホガースとポルノグラフィについて

ホガースにおけるポルノグラフィ的図像作品の意味に関して、具体的に以下の 3 つのことが解明された。

(a)ホガースのポルノグラフィは「理神論」と「フリーメーソン」受容の帰結であり、それはしばしば「好色な聖職者」の図像として結実する。「好色な聖職者」に分類できる図版として、特に、『娼婦一代記』（1732）の第 6 図、『眠る会衆』（1736）、『妄信、迷信、狂信』（1762）を取り上げ、これらの図版の根源的

構造がエロス的要素から成立していることを明らかにした。

(b)「好色な聖職者」とは別に、「好色もの」に分類できる図版があることを示した。具体的には、『ことの前』(*Before*, 1730-31)と『ことの後』(*After*, 1730-31)、『当世風結婚』(*Marriage A-la-mode*, 1743-45)の第5図である。

とりわけ、前二者の『ことの前』と『ことの後』は、明瞭なポルノグラフィであり、公の版画とは別の、いわば、裏側の流通ルートがあった。そして、ホガースのポルノグラフィ的図版の消費者として、貴族階級がいたことを示した。

(c)18 世紀英国のポルノグラフィ的文学(エロティカ)とホガースのポルノグラフィ的図像作品が時に、相互に言及し合う密接な関係性があることが解明された。

ホガースと呼応し合ったポルノグラフィ的文学としては、第1に、クレランド(John Cleland)の『ファニー・ヒル』(*Fanny Hill*, 1748-49)があり、この文学のあるパッセージがホガースの図像の解説となっていることが明らかにされた。

さらに、明示的ではないにしても、ポルノグラフィ的要素を隠蔽している作品として、リチャードソン(Samuel Richardson)の『クラリッサ』(*Clarissa*, 1748-49年)を取り上げ、そこでのクライマックスとなる「凌辱」の場面が、ホガースのポルノグラフィ的図像を参照して描かれている可能性について論証した。

５．主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計　2　件)

中村 隆、「『荒涼館』国家・警察・刑事・暴力装置」、『ディケンズ文学における暴力とその変奏』、大阪教育図書、2012年10月、pp. 149-164

中村 隆、「ホガースと児童労働」、『東北ロマン主義研究』、2014年7月、pp.63-85(掲載決定)

〔学会発表〕(計　3　件)

中村 隆、「メイヒューと児童労働」、東北ロマン主義文学・文化研究会、2013年7月20日

中村 隆、「ホガースとディケンズ」、ヴィクトリア朝研究会、2013年9月7日

中村 隆、「ホガースとメイヒュー」、ヴィクトリア朝研究会、2012年9月21日

６．研究組織
(1)研究代表者

中村 隆(NAKAMURA,Takashi)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号：00207888